

第1回総合球技場基本計画検討委員会 会議録

○ 日 時 平成29年12月19日（火曜日） 午後1時30分から2時55分まで

○ 場 所 山梨県庁防災新館201会議室

○ 出席者

・ 委 員（五十音順、敬称略）

飯沼 順子 石原 光広 佐久間 悟 佐藤 仁司 清水 一彦
土屋 光輝 長倉 富貴 傍士 銚太 松野 弘太

・ 県 側

総合政策部長 総合政策部次長 総合政策部技監、
都市計画課長 スポーツ健康課長
(事務局：リニア環境未来都市推進室)
リニア環境未来都市推進室長 政策主幹

○ 会議次第

- 1 開会
- 2 総合政策部長あいさつ
- 3 委員紹介
- 4 委員長選出
- 5 委員長あいさつ
- 6 議事
(1) これまでの検討状況等について
(2) 国内外の球技場の整備状況について
(3) その他
- 7 閉会

○ 内 容

1 開会

司会：事務局

2 総合政策部長あいさつ

委員の皆様には、たいへんお忙しい中、このたび委員をお引き受けいただき、また、本日この会議に御出席を賜り、心から御礼申し上げます。

総合球技場は、県民の皆様にとって、これまで以上にスポーツの力を実感、体感し、夢や希望、感動、勇気を享受いただける施設であると思っている。

加えて、質の高い施設となると、県外からも多くの来訪者が見込める。更に、球技場への来訪を契機として山梨県各地を訪れてもらうことで、地域の活性化にも資する施設となる。

総合球技場は、本県にとって一大プロジェクトである。名実ともに「県民みんなの球技場」と言っただけのために、ハード、ソフト両面でどういった方策を講ずべきであるのか、本県にとってのスポーツの聖地である小瀬に新たに球技場が加

わることで、既存の施設との相乗効果を発揮させながら、いかに小瀬全体のレベルアップを図っていただけるのか。

また、山梨らしさということを堅持しつつ、持続可能な施設ということで、初期投資、ランニングコストといった面で、県民の皆様の負担をいかに最小限にしていけるのかなど、様々な面で検討を深めていく必要がある。

検討結果についても、より分かりやすく、具体的に、根拠のあるものとして県民の皆様にお示ししなければならない。このたび策定する基本計画には、こういったミッションが課せられている。委員の皆様には、忌憚のない御意見を願います。

3 委員紹介

初めての会議のため、委員及び県側出席者の紹介を行った。

4 委員長選出

総合球技場基本計画検討委員会設置要綱第3条第4項「委員長は、委員の互選による。」の規定により、委員長に清水委員が選出された。

5 委員長あいさつ

私は教育学を専攻しているが、前勤務地での仕事の関係で、日本サッカー協会や日本ラグビー協会、日本スポーツ振興センターの方々と親しくお付き合いをさせていただいた。そういったことから、今回総合球技場基本計画検討委員会の委員になったのも、何かの御縁ではないかと思っている。

委員長という大役を仰せつかったが、微力ながらも全力で務めるので、委員の皆様には、御協力をお願いします。

※ 総合球技場基本計画検討委員会設置要綱第3条第5項「副委員長は、委員長が委員の中から指名する。」の規定により、清水委員長が副委員長に長倉委員を指名した。

6 議事

議長：清水委員長

(1) これまでの検討状況等について

議題（1）について、資料1、2、3により事務局から説明した。

(2) 国内外の球技場の整備状況について

(委員長)

国内そして海外のスタジアムの整備状況などについて、説明をお願いしたい。

(委員)

私はJリーグの立ち上がりからずっとお手伝いしているが、当初の10チームが今では57チームとなった。

まず言いたいのは、負担意識を捨て、負担を減らすより幸せを増やすという方がいいのではないかと。高知県には、まだ応援できるチームがない。山梨の皆さんは本当に恵まれている。J2に落ちたくらいで何だ、と言いたくなるくらいうらやま

しい。むしろこれからは、甲斐の底力を見せて立ち向かおうということだと思ふ。

高知県にチームができないのは、今も野球だ、という人が多いから。しかし、中学も高校も部活の部員数は野球が1位ではない。

そうした中で、山梨は野球だ、サッカーだ、ラグビーだ、アメフトだという議論ではなくて、山梨を応援したくない人は退席してくださいということである。高知で話をする時に、高知を応援したくない人は手を挙げて、という誰も手を挙げない。

なぜ、こういう話をするかという、山梨を応援できる立場であれば、消滅可能都市の問題も解決できるのではないかと思っているから。若者の流出が続いていることを止めないで、一旦出て行った60歳を過ぎた人を地方に帰そうとしている。でも、出る方を止めることが実は大事である。

山梨の子供たちにとって不幸せなのは、日本代表の試合を地元で観られないこと。なぜ、そのことに気づいたかという、「夢見る総合球技場」の絵画コンテストの入賞作品を観たときに、スタジアムには日の丸や日本代表と分かる物が描かれていても、地元のチームの存在を示すものがなかったから。この子供たちがそういう意識で育てば、いずれは出て行ってしまおうと感じた。

私がヨーロッパで生活していた頃、現地の人にあなた方にとってスタジアムとは何ですか、という質問をしたら、故郷、宝、誇り、出会いの場といった、ハード系より人間中心の答えが返ってきた。

そこで調べてみたら、欧米の地域の風格の3条件というものがあることが分かった。一つは、特色ある地元の大学があることが幸せであるということ。

二つ目は、プロの音楽のオーケストラがあるということ。日本の政令市以外であるのは高崎、山形、金沢の3つだけだが、ドイツでは5万人以上の町には全部ある。

三つ目は、プロスポーツチームがあることを皆さんが条件として挙げていた。山梨でいえばヴァンフォーレ甲府。その存在価値をどうみんなが表現するか。

仙台がいま盛り上がっている。サッカーのユアテックスタジアムとバスケットボールのゼビオアリーナ。仙台の若者たちは、東京の大学へ行くよりも地元に残る人が増えてきている。それは、仙台を応援し続けたいということであると聞いた。

世界の流れを見ると、世界のスタジアムに関するものは、実は進化している。宇沢弘文先生が言っている社会的共通資本と位置付けられて、進化している。日本とは少し違う。

最初に、欧米の「フィールド」という言葉を日本では「グラウンド」という言葉に置き換え、次に「スタジアム」という言葉を日本では「競技場」に置き換えた。

いま、欧米では「アリーナ」、「パーク」、大リーグだと「ボールパーク」。「スタジアム」ということばを捨てて、もっと人間本位な文化的な名前に代わってきている。

日本の場合やはり「競技場」で、場所が中心になった理論である。日本では「競技場」から「アリーナ」、「パーク」になるその途中に「球技場」があるのかな、という気がした。

世界の流れには、5つのキーワードがある。

一つは、みんなの家、ホーム。よくホームスタジアムというが、これはアイデンティティや誇りの現れである。

二つ目が、劇場性とか満員感。これは専門性、つまり陸上トラックがあると球技は観戦しにくい。あと、ダウンサイジング。昔はキャパシティを大きくしてきたが、今は2万人前後くらいにダウンサイジングして、その代わりすごく快適な観戦環境をつくっている。そこに球技場という存在が出てくる。

三つ目が、出会いの場というキーワード。ラウンジ等、試合がないときでも出会える場をつくること。

四つ目が、代表戦が見られるということ、子供たちを地域の未来として考えるなら、子供たちがいったい何を望んでいるのかというところ。四国には日本代表が試合をするスタジアムがない。

五つ目が、経済性を重視した、一つはネーミングライツ。欧米では募集権を地元クラブに持ってもらって、そこが稼いだお金をスタジアムなりチームに還元することで、スタジアムの価値が更に高まっていく。大リーグは全部そう。あとはエコスタジアムとか防災というものがある。

こういった流れを 2008 年以降、何回かヨーロッパに行ってみてきた。日本でもようやく動き始めてきた。

だから、球技場の議論というのは、実は山梨だけで勝手に盛り上がっているわけではない。全国的なものである。冊子「スタジアムの未来」の一番後ろのページの日本地図を御覧いただくと、まず、J1、J2、J3、JFL のカテゴリーに関係なく、スタジアムの建設が盛り上がっていることが分かる。しかも専用化している。

J1 では、コンサドーレ札幌が野球場のドームとは別の場所を考えようとしている。それから、湘南、清水も。ガンバ大阪は吹田にスタジアムができた。セレッソ大阪も大きい陸上競技場から、その横のキンチョースタジアムの場所につくろうとしている。J1 に昇格した長崎も市内に検討している。

J2 では、山形、甲府。京都は亀岡駅の前につくることが決まっている。

J3 では、既にできあがっているのが長野、北九州。琉球も基本計画ができあがっている。秋田、富山、鹿児島も検討委員会ができている。

JFL でも、八戸に防災拠点を絡めたものがあり、今治にもできあがっている。来年から JFL に入ることになったコルバトーレ女川、人口 4,000 人ぐらいの町で JFL までくることはすばらしい。こういうチームがどんどん出てきてほしいと思っている。

最後に、大きく分けて 3 つの条件で、こんなスタジアムをみんなで育ててみませんか。みんなの負担が軽減されるというより、みんなで大きく育ててみませんかということをお願いしたい。

一つは、みんなを満足させて地域のアイデンティティ、誇りとして愛され続けるようなスタジアム。

二つ目は、コンサートなど、スポーツ以外にもいろいろな使い方をして文化的にも経済的にも地域社会に大きく貢献できるようなスタジアム。

三つ目は、地元のプロスポーツの経営環境にふさわしいスタジアム。

(委員長)

今日は最初の委員会でもあるので、これまでのお話を受けて、皆様の御専門の立場から、今後の基本計画の検討に当たって重視すべき点、留意すべき点などについて、御意見などをいただきたい。

(委員)

総合球技場検討委員会では、地元の皆様の声を、県民の意見を聴く会などを踏まえて、たいへん丁寧に報告書をまとめていただいたと思う。

いま、この国全体がスポーツ施設について、海外の好事例を見ながらもう一度見直さなければいけないという転機にきていることは間違いない。

実は全国を見渡しても、球技場というのは、平成 17 年に千葉市にジェフ千葉のホームスタジアムであるフクダ電子アリーナができてから 10 年間、ひとつも新設されなかった。それが 2 年前の平成 27 年から続々と国内にフットボールスタジアムができてきた。その中で大きな波が 4 つある。

国でも言っているが、赤字を出すばかりではなく、しっかり収入を得ていく施設でなければならないこと。

球技は雨でも行うスポーツなので、観客席に屋根がない施設では、ビジネスや街の活性化に結びつくことは決してないということが明確であること。

本県では建設予定地が決まっているので、そこまでのアクセス。リニアという新しい公共アクセスの整備も決まっている中で、既存の小瀬が持つ約 3,000 台の駐車場も活かしつつ、県全体から皆さんが楽しめる立地にする。

そして、ホスピタリティ施設。将来このような会議がスタジアムの中で行われるなど、試合がない日も地域の皆さんが利用して快適な空間になる施設であること。

こういうスポーツ施設へと舵が切られている。

フットボールスタジアムの新設は、国内各地で積極的に検討が行われているが、ぜひ、全国に先駆けて山梨県が好事例を国内に示せればと期待している。

(委員)

ここ最近、国でもスポーツビジネスの成長産業化ということで、スタジアム・アリーナの改革というところを挙げている。

スタジアムをつくるに当たっては、今まで設計や建設からすぐに入ってしまったようなスポーツ施設の建設ではなくて、欧米に見習って、最初にプロジェクトのビジョンをしっかりと考えて、その後に計画、コンセプトづくりを行い、どうやって運営するのかというところの採算をしっかりと見た上で、設計に入っていくと、プロフィットセンター化はなかなか難しいという話がある。

これからつくるスタジアムがプロフィットセンター化ということを考えていくのであれば、イニシャルコストだけでなく運営収支も含めて、計画づくりをしっかりとやらなければいけないということが重要であると考えている。

現状プロフィットセンター化できている日本のスタジアムは少ないと思う。

今年のシーズンに日本の J1、J2 の全スタジアムを回り、今のスタジアムの実態がどうなっているのかを調査したが、その中で、プロフィットセンター化に当たっての重要なポイント、スタジアムの建設について 5 つの指標をつくった。

一つは、地域環境。スタジアムへのアクセスや地域密着度はどうか。

二つ目は、複合性。グルメやショップなど、施設の充実度はどうか。

三つ目は、快適性。屋根が完備されているか、座席の幅はどうかなど、サッカースタジアムの中だけの比較ではなく、映画館や新幹線など他のエンターテインメント施設と比べてラグジュアリー感があるか。

四つ目は、先進性。Wi-Fi が完備しているか、IT をどれだけ活用しているか。新しいビジネスを生み出す上で大事。

最後は、効率活用。試合がある日の入場率はもちろん、ない日にどうやって活用していくか。

これら 5 つの指標は、昨年、スポーツ庁が出したスタジアム・アリーナ改革ガイドブックにも盛り込まれており、今後スタジアムをつくる上で、プロフィットセンター化する上で、非常に大事であると思っている。

今回 PFI を前提とするのであれば、採算がとれるような施設運営というところを第一に考えていかなければいけない、ひいてはそれが、地域への負担を減らすということになると思う。

一概にイニシャルコストを低減させることだけを考えるのではなく、運営収支を改善するような投資については、使うところには使うという考え方も必要ではないかと思う。

海外を見ても、ダウンサイズをして規模感は抑えるが、チケット単価をどれだけ上げるかというところに注力し、ビジネスラウンジやスカイウォークを充実させるなど、お金をかけるところにはかけており、収益化できる部分に関しては建設コストを突っ込むという傾向にある。民間を活用して収益化できる、または収益が見いだせるところに関しては、設備を充実させることも一つのポイントであると思う。

(委員)

スポーツマネジメントを専門としているが、最近市民やスポーツ関係の団体の方々から、スポーツを活用して居場所や交流の場をつくりたいというような要望を受けることが多い。例えば、外国人支援団体の方から、通訳・翻訳サービス、生活支援や就職サービスはしているが、どうしてもそうした支援だけでは彼らの居場所ができない、何かスポーツイベントを使って地域で住民と交流できる場をつくってもらえないか、というようなこと。

あるいは、健康づくりで高齢者のための研修会を学生に企画してほしい。健康プログラムなどは他にもいろいろあるが、同じ年代の高齢者だけが集まってやるよりは、学生が企画してくれ一緒に参加することでみなさんやる気になる、というような話である。

私は、日ごろから学生たちと学外で様々な活動をしており、例えば、ヴァンフォーレ甲府のホームゲームでも毎回キックターゲットというコーナーを企画担当しているが、普段はキャンパスの中で、スマートフォンと2、3人の友達とアルバイトさえあれば全てがまわってしまうような生活スタイルで、狭いコミュニティの中にいる学生を、ゼミの活動、クラスの課題ということで、地域のスポーツの現場に連れて行くと、初めは渋々動いていた彼らも、地域住民の方と関わり、参加者から活動に対するお礼の言葉をいただくと、とたんにやる気が出てくるなど、スポーツが持つ魅力には支える側でもいろいろあるのだと感じる次第である。

今回新しいスタジアムをつくるのに当たって、「競技場」というとスポーツの施設に限定されるというふうに皆さんに思われてしまいそうだが、皆さんが集まるような場、山梨県でいうとよっちゃばれ広場の屋根がついているバージョンみたいな、そこに行けばいつも何かがある、何もなくても憩いの場である、そういうような場になればいいと思っている。

コストセンターからプロフィットセンターへ、というところは大きな課題であると思うが、行政が箱物を用意して、どうぞ使ってくださいと、スタジアムに呼び込もうとするのではなく、スタジアムの内側から住民が主体的にいろいろなイベントを仕掛けて、みんなで楽しい場を創出していくような場になるよう目指せればと思う。

スポーツが持つ魅力はいろいろあって、するスポーツ、観るスポーツだけではなく、支えるスポーツという考え方がある。いま、スポーツボランティアの養成は、県レベルや全国レベルでも盛んになってきている。例えば、ヴァンフォーレさんは既に支える組織が確立しているけれど、他にもいろいろな形の関わり方がある。スポーツボランティアや、自分たちでイベントを企画してそこに人を集めるというようなことを仕掛けられたらいいな、と考えている。

(委員)

バリアフリーとかユニバーサルデザインについては一般的に思想化しているので、あえて細かいことを言うものではないが、最新のバリアフリーということを考えるのであれば、隈研吾さんが設計し、現在、建設中の新国立競技場のような事例をおおいに参考にさせていただければと思う。また、ITもますます進展すると思うので、それを

どう取り組んで行くのか、ただ、非常に維持管理費がかかるものではないかと思っている。

球技場のフィールドについては規定があって変えようがないし、収容人数も既に決まっているので、この場で議論することではないと思っている。

これから考えるのは収支などを含むソフト施策、基本構想の中の「整備の方向性」にある、山梨らしさ、山梨の強み、利用用途の多様化などであるが、これらのことは言葉では表現できても、これを具体的にどうするかということになると容易ではない。非常に難しい問題である。業者に委託すれば出てくるというものでもない。ヨーロッパにおけるアイデンティティの話が出ていたが、ヨーロッパと日本では文化、伝統が全く違うし、社会背景も異なりアイデンティティを同一視できない。

ヨーロッパから文化を輸入すればすぐに定着するといったような、そんなたやすいものではない。違いがどこにあるのかという構造的なところをよく洞察しないと、球技場は単なるつくりものになってしまうという可能性がある。

収益の面で言うと、山梨は滞留人口が非常に少ないので、平日の利用率を高めるため、高齢化する団塊の世代に対するソフト政策をどうするのがポイントになるのではないかと思う。

また、赤字の面でいうと、負担を県が担うとすれば、県にどれくらいの覚悟があるのかということに尽きるのではないかと思う。

みんなで育てるスタジアムということについては、施設は公的資金で整備せざるを得ないが、その後の運営において、球技場整備に賛同する人たちによる会員などを募り自分たちの負担で育て運営していくスタイルになれば、アイデンティティがかなり確立されていくのではないかと考える。

(委員)

大宮アルディージャというチームで NACK5 スタジアムの改修に関わっていた 10 年前、私は、最初に山梨で行った講演会で、これからの山梨のスポーツを牽引するために、スタジアムが非常に重要なのではないかというお話をした記憶がある。その私が、いまこの場に身を置いていることは感慨深い。

一方で、ヴァンフォーレ甲府が J1 という最高峰を死守した上で、本日この場に來たかったが、御声援いただいた皆様の御期待に応えられずに今日を迎えたことは残念である。

私は県のサッカー界を代表してこの委員会に参加している。これから、総合球技場について、県民にとって有益な施設となるよう、また、施設にすべく、皆様と一緒に努力して参りたい、また、安全で快適な、老若男女の皆様が満足いただけるような、県民の皆様の御負担を極力抑えられるような施設にできればいいと考えている。

建設予定地の周辺は武道館があるなど、いろいろなスポーツの複合施設である。球技場は専用球技場として役割が重複することがなく、地域のスポーツコンプレックス、スポーツの新しい拠点として、あるいは新しい公共施設のような役割を担うようなものをつくって、山梨から国内外に発信できればいいと期待している。

今の陸上競技場は、応援する側からも、プレイする側からも互いの距離が遠い。選手も応援を感じ取りながらプレイすることがパフォーマンスに通じることがあると思うので、その遠さを解消することは、誰にとっても有益であると思う。

また、スポーツはサイエンスである。走っている速度やジャンプの高さを測ったり、移動距離を測定したり、健康というところでも、様々な方々が施設に来て、様々な測定をするということになると、スポーツだけではなく健康という側面でも十分活用できる。

(委員)

ラグビー協会からは、女性目線でいろいろな意見を言うことを期待されてこの場にいる。

また、これからの未来の子どもたちの思いや願いなど、将来のためという目線からも、委員の皆さんのいろいろな話を聞きながら、意見を言いたいと思っている。

ラグビーは、年 2 回だけ小瀬で公式戦を行っているが、なかなか観客数が伸びないので毎年悩んでいるところ。

「県民みんなの球技場」というところで、皆さんと一緒にこの場で考えていけたらと思っている。

(委員)

私は、サーカー、陸上、アメリカンフットボールを経験してきた競技者である。先ほど地元に残る人たちが増えるという話があったが、私自身は、地元の中で一生懸命がんばった後に、大学で一度外へ出て、外でがんばる人たちと肩をぶつけ合って地元に戻ってきて、地元の良さを強く感じた。

外に出ることも大事であるが、外に出て行った地元の人たちが地元に着用を持てるようなことが、スポーツビジネスというか、スポーツを通じてできたらいいと思う。

地元で商売をやっているが、小さい商店街は、ショッピングモールや大きい商店街にブースを出して、皆さんはそこに店を出しており、商店はすっからかんという状態が続いている。

ここでいう費用対効果がある球技場というところであるが、地元の中小企業の人たち、地元の商店街目線で言うと、この施設は本当に必要なのかという感じで見ているのかな、と思っている。

そこで、何が本当に愛されるスポーツなのか。何が本当に必要とされる総合球技場なのかというところを突き詰めていきたい、しっかりと学んでいきたいと思っている。

北杜市にアメリカンフットボールの殿堂があるが、私は、ポール・ラッシュ先生の "Do Your Best and It Must Be First Class" という言葉を心の奥底に刻み、その精神のもとにこの会議に参加している。

(委員)

私が岡山に勤務していたときに、倉敷の隣に清音村という人口 5,000 人くらいの村があった。そこで、お手伝いをしたときに、高梁川という一級河川の河川敷に、村民が自らの手で 3ha の芝のグラウンドを自分たちのためにつくったことに感動した。更に、きよねスポーツクラブというのが今もあるが、そのクラブハウスを自分たちで建てて、それはサッカーくじ toto の助成の第一号案件になった。

この「きよね夢テラス」というクラブハウスを、村民は維持会員制ということで、管理人の人件費も含めてみんなで負担している。これは負担と言うよりもみんなの気持ちである。

コストとか負担感というのは、お金以外に結びつかない。負担感よりも参加意識とか、愛情表現とか、ボランティアとか、そういう方が人間的であるし、負担感というのは大人が感じる感覚である。愛情表現や参加意識は、もっと若い人が、そこに山梨愛をどう表現していくかということ、このスタジアムに求めればいいのかと思う。

例えば、あるチームのホームタウンの住民が、アウェイゲームの土地にホームタウンから流出した人が住んでいることが分かったら、そのアウェイゲームのチケットを買って、よかったら応援に行つてよ、というようなプレゼントをする。私がドイツに住んでいるときに見かけたが、それをやり続けると、プレゼントされた人がその後応

援してくれるようになる。これも寄附の文化であると思う。山梨愛で寄附を表現することで、ふるさと納税制度よりも全国、世界の人に参加できる、そういうスタジアムになればいい。

この前、八戸のスタジアムに、JFL のチームで J3 に上がれなかったヴァンラーレ八戸の試合を観に行ったとき、変わったユニホームを着ていた人たちがいたので聞いたところ、アイスホッケーのフリーブレイズという地元のチームの人たちで、同じ八戸ということで応援に来ているとのことだった。ハーフタイムの時に紹介されていたが、何て美しい八戸愛なのだろうと思った。

本県のスタジアムにも、アメフトやラグビーの人がヴァンフォーレの応援にユニホームを着て駆けつけるみたいな、そういうところから、負担ではない何か、それを見た子供たちや大人の考えが変わるのかな、ということをも思った。

(委員)

このような計画や制度設計をするときに、いちばん大事なものはコンセプトや理念を明確にするということである。

既に各委員から出ているが、幸せになるとか、健康になるとか、そういう人間の価値を形成するようなコンセプト、理念を形成することがイノベーションの本筋をとらえることになる。コンセプトを明確にして県民に示すことが求められる。

その上で、整備の視点として、一つは次代を担う若者の視点は重要であると思う。

もう一つの視点は、社会がグローバル化だけではなくダイバーシティ化しているので、ダイバーシティ社会の視点が求められる。既にお話が出たように障害者とか、外国人とか、女性とか、高齢者とか、あるいは山梨県でも今取り組んでいる一人親家庭とか、貧困家庭とか、こういうダイバーシティ社会の人たちが幸せになるような視点が、計画の中で必要ではないかと思う。

若者の視点の中で忘れていけないのが、日本の教育産業で世界に誇れるのが学校体育であること。世界に類のない日本特有の伝統であり、我々が運動会やスポーツ大会でラジオ体操第一をすると留学生が驚く。なぜできるのか。それは、我々が学校体育で学んでいるからであって、この日本が誇る学校体育と球技スポーツとを結びつけることが重要な視点である。

また、我々のプロジェクトで、県内の高校生 1 万 5 千人にアンケートをとったところ、いちばん関心を持っていることは、自分の進路や進学ではない。音楽とか映画であり、この 2 つで 42% を占める。つまり、若い人たちは芸術や文化を求めていると同時に、若者が集まれる場を求めているのではないか。

山梨県では、音楽とか映画を鑑賞する場が少ない、そういうことが整備の検討の中でヒントになるのではないかと思う。

最後に、シンボリック的な整備をすべきである。シンボルとなるトップスポーツはヴァンフォーレ甲府であると思うが、ここをオール山梨で育てていく。そのためには、トップスポーツの指導者も育てなければならない。青少年のスポーツの育成や指導者の育成とともに、もちろんトップチームの資金援助も欠かせないが、そうしたシンボリックなトップチームの必要性を強調すべきである。それが地域振興の活動拠点になるのではないかと考えている。

(3) その他

次回の委員会の開催について、事務局から説明した。
(先進地視察を予定。日程については後日調整。)

(委員長)

今日は初回にもかかわらず、これまでの経緯や国内外の状況の説明、また、皆様からキーワードを含めた様々な貴重な御意見を賜った。たいへん有意義な初回になったと思う。以上で予定されていた議事を終了する。進行を事務局にお返しする。

7 閉会

司会：事務局